

# 衣 服

アイヌ語の衣類の総称は、アミツ（北海道西部方言）またはチミブ（北海道東部、千島、樺太方言）です。アとチはいずれも「私たち」、ミは「着る」、ブは「もの」、



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター  
調査研究部 研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

全体として「私たちが着るもの」となります。具体的な衣服を表す言葉として知られているのはアットゥシです。アツは繊維や紐を意味し、トゥシは狩の獲物の毛皮を示すルシから来ています。これは、織物を作る技術を取得する以前、人々は動物の皮を加工し着物として身に纏っていたため、「狩の獲物」である「毛皮」が衣服を示す言葉の一部として残ったのです。アットゥシはオヒョウニレ（オヒョウダモともいう）、ハルニレ、シナの樹皮やイラクサ、ときにはツルウメモドキ、葛などからとった繊維を糸に紡いで織られます。それ以外にも鳥皮、犬やエゾ鹿の抜け毛なども糸に撚って使われていました。

なかでも、代表的なオヒョウニレを素材とするアットゥシの製作過程は、まず、樹の皮を剥ぐところから始めます。繊維の柔らかさから直径15cm、樹齢10年から15年ほどの樹が最適とされます。樹が地下水を汲み上げ枝先まで送水する5、6月頃、樹の下部に切り込みを入れて皮を起し樹皮を剥ぐようにすれば、枝先まで一気に皮を剥ぐことができます。皮を剥がれた樹は放置すると枯れてしまうところ、アイヌの人々は、脇から幾本も出る1m強の若木を、四方の地に這うように木枝を使って差し止め、生育するよう工夫しました。剥いだ樹皮は外皮を取ったあと、内皮を沼や池の水に漬けぬめりを出し落とし、水洗いして乾燥させてから、細く裂き糸に紡ぎます。古い時代のアットゥシは、極細の糸2本を撚り合わせて使っていましたが、今は

裂いたままのものを結び繫いだ1本の糸で織られています。かつては縦糸の本数も500本から600本（現在は平均120-150本）であり非常に

丈夫で軽く、保温・防水性にも優れていたため、潮風や波の飛沫を受ける和人の漁師達はこぞアットゥシを求めました。記録によれば、宗谷や釧路で1,000枚程、斜里では1,500反ものアットゥシが生産されていました\*。従って、北海道全体と樺太とを合わせれば、膨大な数のアットゥシが本州に輸出されていたはずですが、本州の神社には、黄土色の地に紺で模様を描いた、明らかにアットゥシと思われる上着を着た漁師が描かれた絵馬が多数奉納されています。

また、同じくアットゥシの材料として用いられるイラクサは、エゾイラクサとムカゴイラクサの2種類があります。ムカゴイラクサには節がないため長い繊維が採れますが、絶対量が少ないのに対し、エゾイラクサは群生し草丈も高いため、節があっても上手に繊維を繋ぎ合わせ、雪に晒して白糸にしていました。テタルペ（またはレタルペ：「白いもの」を意味する）と呼ばれるイラクサから作るアットゥシは、樹皮から作るものよりさらに色が白く、繊細な風合いが珍重されました。イラクサは、川真珠貝の殻で表皮を削り取り、残った繊維を糸に撚って束ね、何度も水に漬けては雪に晒すということを繰り返して、それを織機にかけて織り上げます。素材を自然から頂くことを含め、作業は全て手作業のため、膨大な時間と労力を要します。しかし、一切自然を損なうことのなかったアイヌの人々の生活は、永久に持続可能な生活を送るための知恵に満ちていたと言えます。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大学北海道短期大学部（滝川市）で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007、2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～9』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。

\*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

\*参考文献  
2002年 本田優子「近世北海道におけるアットゥシの産物化と流通」、  
（北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第8号）